

魏志倭人伝を考える

—魏使はなぜ末蘆国と不弥国に行ったか—

1 末蘆国

私は「魏志倭人伝」を読み始めて日も浅いのであるが、帯方郡から邪馬台国までの行程について、どうしても腑に落ちないところが二か所あった。

一つは、なぜ、魏使は、伊都国の港ではなく、末蘆国の港（東松浦半島北端の呼子港。唐津湾奥の港という説もある。）に上陸したかである。帯方郡を出発した魏使は、対馬国、一大国（壱岐国）を経ていよいよ九州本土に上陸するのであるが、その上陸地は、「魏志倭人伝」によれば末蘆国である。上陸した魏使は、末蘆国を経て、伊都国まで五百里の陸路を歩くのである。

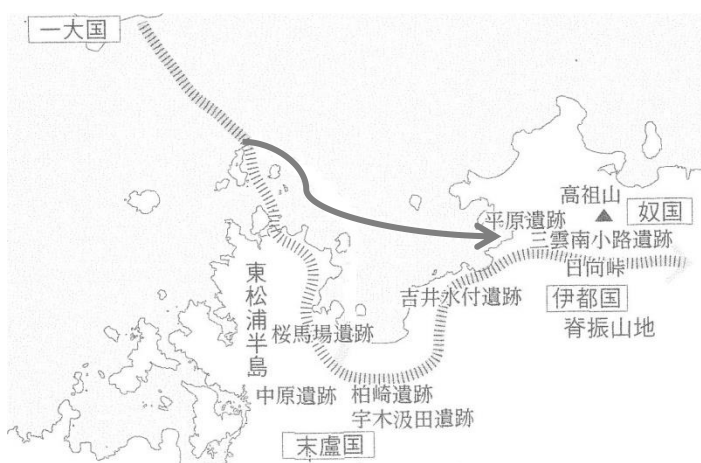
この行程について、「魏志倭人伝」は、「(一大国から) また一海を渡る千余里、末蘆国に至る。四千余戸あり。山海に^そ浜うて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鮓^{ぎとぶく}を捕え、水深浅となく、皆沈没してこれを取る。東南陸行五百里にして、伊都国に到る。」と記している。一大国から海を渡って、末蘆国に上陸する。四千余戸の住居が山と海との間の狭い陸地にある。道を行くと、草木が盛んに茂っていて、前を行く人が見えないほどである。住民は、漁労を行っており、海が深い浅いにかかわらず、潜って魚やアワビを獲っている。末蘆国から東南に五百余里行くと伊都国に到る、といているのである。末蘆国に上陸した魏使は、末蘆国の地形や住居、住民の生活状況などをつぶさに見聞しながら、草木が盛んに茂っていて、前を行く人が見えないような道を辿って、五百里もの道を伊都国に向かうのである。暑い夏の盛りに難儀なことであつたらう。

「魏志倭人伝」は、伊都国は、「東南陸行五百里にして、伊都国に到る。」に続けて、「官を爾^に支^きといい、副を^せ謨^ま觚^こ・柄^へ渠^ま觚^こという。千余戸あり。世々王あるも、皆女王国に統属す。郡使の往来常に駐^{とど}まる所なり。」と記している。伊都国には、官がいて、代々王がいるが女王国に統属しているとし、郡からの使者が往来するときに常に駐在している所であるといっている。さらに、邪馬台国（連合）の政治状況を述べた条に、「女王国より以北には、特に一大率^{いちだいそつ}を置き、諸国を檢察せしむ。諸国これを畏憚^{いたん}す。常に伊都国に治す。国中において刺史の如きあり。王、使を遣わして京都・帯方郡・諸韓国に詣り、および郡の倭国に使うや、皆津に臨みて搜露^{そうろ}し、文書・賜遺^しの物を伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず。」と記しており、伊都国には特に一大率が置かれており、帯方郡や韓諸国からの使いなどが来たら、港で文書・賜遺の物を検査し、女王に詣らせる際に、間違いがないようにしているというのである。この津すなわち港は伊都国の港である。伊都国は海に面しており、今でも良港がいくつもある。弥生時代の王墓とされる平原遺跡などのほかにも多くの遺跡があり、このうちの^{うるうじとうきゅう}閩地頭給遺跡からは準構造船の一部が出土しており、海外との交易に使用できる良港があつたことが容易に推測できるのである。その港が韓諸国や中国との外交や交易に使用され、使節や商人が上陸し、賜遺の物や交易品が陸揚げされたのである。こ

のために伊都国には特に一大率がおかれ、伊都国の港に上陸した帯方郡や韓国の使節が持参した文書や賜遺の物を検査する役職の者がおかれているのである。

一大国から伊都国までの距離は、海路で直接行くのであれば、現在の地図上で約四十六キロメートル（約五百四十里）である。一大国から伊都国までの「魏志倭人伝」による行程は、一大国から末蘆国（呼子港）まで、同じく海路約三十キロメートル（約三百五十里）、末蘆国から伊都国まで同じく陸路約四十三キロメートル（約五百里）、計約七十三キロメートル（約八百五十里）である。両者を比較すると、一大国から海路で直接伊都国に上陸する方がはるかに、行程距離が少なく、草木茂盛し行くに前人を見ないような道を行く難儀もしなくて済むのである。行程の多くが波穏やかな唐津湾内であり、危険も少なく、さらに伊都国には前述したように帯方郡との外交や交易の窓口となる役職・施設が設置されているのである。一大国から伊都国に海路で直接上陸する方がはるかに合理的なのである。

図1 一大国から末蘆国・伊都国への行程図（概念図）



(注) 「邪馬台国は福岡平野にあった」(高柴昭)を一部修正して作成した。

→印は海路伊都国に上陸するルート

---印は「魏志倭人伝」に記すルート(推定)

2 不弥国

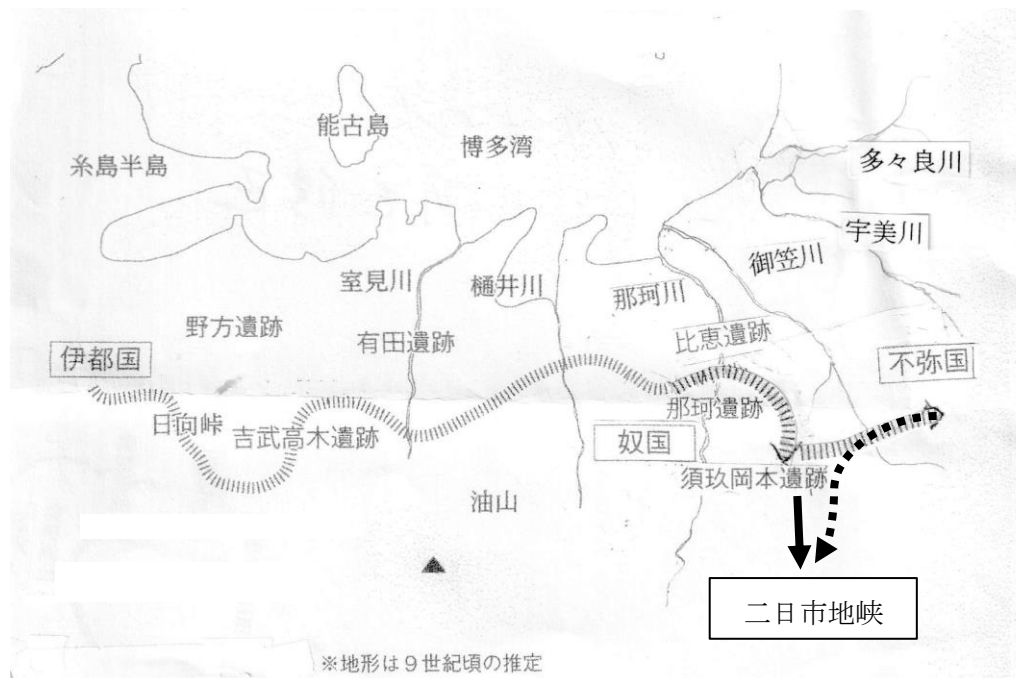
二つ目は、なぜ魏使は、奴国から二日市地峡を経て邪馬台国に直行せず、その東の不弥国を経て邪馬台国に向かったのかである。

「魏志倭人伝」は、この間の行程について、「(伊都国から) 東南奴国に至る百里。官を兕馬觚といい、副を卑奴母離という。二万余戸あり。東行不弥国に至る百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。千余家あり。」としている。魏使は、伊都国から奴国に至り、さらにその東の不弥国へ向かうとしているのである。魏使は、まず伊都国の国邑である怡土

付近を出発し、道なりに南東方向に進み、伊都国と奴国の境界付近に当たる日向峠^{ひむか}を越え、その東に広がる福岡市の早良平野に入り、さらに東方向に進んで、奴国の国邑と考えられている福岡平野の須玖岡本遺跡に至り、ここからさらに東に進み、不弥国に至るのである。

須玖岡本遺跡のすぐ南には二日市地峡^{ふつかいち}があり、この地峡を南下すると筑紫平野であり、この平野に卑弥呼が都を置いている邪馬台国があるのである。二日市地峡は筑紫山地の一部である西側の背振山地と東側の三郡山地の間の狭い地峡で、後にはこの地峡に大宰府防衛のために水城が作られ、現在も鉄道、高速道路、幹線道路などの福岡平野から筑紫平野に抜けるライフラインが集中しているところである。当時も福岡市の中心部にある比恵・那珂遺跡から須玖岡本遺跡、二日市地峡帯を経て筑紫平野に至る付近は弥生時代の遺跡が連なる弥生遺跡の集積地帯で、交通の要衝であったことは変わらない。福岡平野から筑紫平野に抜けるにはこの道が最も容易で、近道である。いったん不弥国に行き、さらに引き返して二日市地峡を通過して、筑紫平野に行く必要はないのである。不弥国から直接筑紫平野に行くには、三郡山地の険しい山道を抜けなければならず、魏使がこの山道を通らなければならない必然性は全くない。すなわち、奴国の国邑からそのまま南下すれば、容易に邪馬台国へ行くことができるのであり、わざわざ奴国からその東にある不弥国を経て邪馬台国に行く必要はないのである。

図2 伊都国から不弥国への行程図（概念図）



(注) 「邪馬台国は福岡平野にあった」(高柴昭)を基に改変して作成した。

→ 印は直接二日市地峡を通るルート

---▶ 印と ---▶ 印は「魏志倭人伝」に記すルート(推定)

3 魏の倭国巡視

(1) 倭国巡視の背景

私は、「魏志倭人伝」が記す邪馬台国への行程のうち、前述のとおり末蘆国及び不弥国を経る行程がどうしても腑に落ちなかったのである。千九百八十二年六月、全国邪馬台国連合協議会第3回九州大会において、伊都国博物館の岡部裕俊館長（当時）にお会いすることができた。チャンスである。岡部館長に早速上記の疑問を質問したところ、「私は、魏使の行程は、巡視であると考えている。」とのことであった。まさに目から鱗が落ちる思いであった。

邪馬台国の女王卑弥呼は、魏から「親魏倭王」に任命され、魏の皇帝を頂点とする冊封体制に組み込まれたのである。卑弥呼は、景初二年（景初三年の誤り。西暦二百三十九年）六月に、大夫難升米等を帯方郡に送り、天子、すなわち魏の皇帝に朝献を求めている。この前年二百三十八年は、遼東郡から朝鮮半島北部に割拠し、倭国と魏との交通の阻害要因となっていた、公孫氏（公孫淵）が魏の司馬懿によって滅ぼされ、この阻害要因が取り除かれたのである。卑弥呼は、この機を捕え直ちに帯方郡に使節を派遣したのである。使節を受けた帯方郡の太守劉夏は、使節に案内を付け、魏の京都に送り届けている。時の魏の明帝は、これに応じて卑弥呼を「親魏倭王」に制証し、諸々の賜物を与えている。この事情について「魏志倭人伝」は、次のように記している。

すなわち、「その年（二百三十九年）十二月、証書して倭の女王に報じていわく、『親魏倭王に制証す。帯方の太守劉夏、使を遣わし、汝の大夫難升米・次使都市牛利を送り、汝献ずる所の男生口四人・女生口六人・斑布二匹二丈を奉り以て到る。汝がある所踰かに遠きも、乃ち使を遣わして貢献す。これ汝の忠孝、我れ甚だ汝を哀れむ。今汝を以て親魏倭王となし、金印紫綬を仮し、装封して帯方の太守に付し假授せしむ。（中略）今、絳地交竜錦五匹・絳地纁粟罽十張・縞絳五十四・紺青五十四を以て汝が献ずる所の貢直に答う。また特に汝に紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十四・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各々五十斤を賜い、皆装封して難升米・牛利に付す。（中略）故に鄭重に汝に好物を賜うなり』と」である。

魏の皇帝は、遠路はるばる貢献してきた卑弥呼の忠孝を非常に喜び、証書して親魏倭王に制証し、金印紫綬を仮し、そのほかに多くの賜物を下賜している。この段階で邪馬台国は、魏の冊封国として認められ、魏を宗主国とする冊封体制に組み込まれたのである。この文の中で魏は、金印紫綬等については、「装封して帯方の太守に付し假授せしむ。」とし、帯方郡の太守劉夏に付して太守から倭国に届けさせるとしている。ここに魏の思惑が隠されているのである。新たに冊封した倭国については、「漢書」（後漢の班固（三十二～九十二）撰）の「地理志」の「燕地」の条に「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国となす。歳時を以て来り献見すという。」「論衡」（後漢の王充撰）の中に「周の時、天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬻艸を貢す。」といった程度の記録しかなく、ましてや中国の役人が直

接倭国を訪れたことはなく、中国人には、倭国の状況はほとんど知られていなかったのである。

なお、後漢の正史「後漢書倭伝」には倭の国の状況について詳しい記述がある。しかし、「後漢書」は「三国志」が成立してから百年以上も後の南朝宋の時代に范曄（三百九十八～四百四十五）によって撰されたもので、「建武中元二年、倭の奴国、奉貢朝賀す。（中略）洪武、賜うに印綬を以てす。」「安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う。」などの倭に関する独自の記事もあるが、多くが先に成立していた「魏志倭人伝」の記述をおそうているとされている。

当時の魏は、魏・呉・蜀の三国が鼎立し、互いに抗争を繰り返している状況にあった。特に呉は、遼東半島・遼東郡から楽浪郡、帯方郡に割拠していた公孫氏と結び、山東半島に海路、数万の兵を送り、魏を牽制したりしている。公孫氏は滅亡したものの呉の海路からの侵攻の脅威は残っているのである。魏としては、東方海中にある倭国の実状を把握しておくことは、呉の海路からの脅威に備えるためにも必定であったのである。魏が倭国に期待していたことは、呉が海路、魏に侵攻するなど脅威が具体化した時の助力であり、これは卑弥呼を親魏倭王に制詔し冊封体制に組み込んだことに現れており、さらに前述のとおり卑弥呼からのわずかな貢物に対して、魏の皇帝が比べものにならない豪華で大量の下賜品を与えたことから推測できる。

(2) 倭僞等の倭国巡視と効果

魏は、倭国に関する詳しい情報を収集すべく、帯方郡に対して、魏の皇帝が卑弥呼に授けた証書と金印紫綬等の伝達を名目に、倭国への遣使を命じているのである。これを受けて帯方郡の太守弓遵^{きゆうじゆん}は、正始元年（二百四十年）に倭国に使節を派遣している。これについて「魏志倭人伝」は、「正始元年、太守弓遵、建中校尉倭僞等^{ていしゆん}を遣わし、証書・印綬を奉じて倭国に詣り、倭王に拝仮し、ならびに詔を齎^{もち}し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因って上表し、証恩を答謝す。」と記している。なお、帯方郡の太守劉夏はこの時には任を解かれており、後任として弓遵が任命されている。

魏本国の指示を携えた倭僞は、対馬国、一大国を経て、外交・交易の窓口である伊都国に直接上陸せず、一大国から最も近い上陸地である末蘆国の東松浦半島先端の呼子港に上陸し、草木茂盛し、前を行く人が見えないような道を歩き、伊都国から奴国、不弥国を経て、それぞれの国までの地理、行程を測り、民衆の生活・風俗・習慣、統治体制などをつぶさに巡視・見聞し、卑弥呼が都を置く邪馬台国に入ったのである。邪馬台国に入った倭僞は、王都の様子、卑弥呼の統治状況、卑弥呼と対立していた狗奴国の統治体制などを含め、さらに詳しく倭人の国の実情把握に努めたのである。倭僞の派遣が巡視を兼ねたものと考え、と、「魏志倭人伝」が記す末蘆国から不弥国を経て邪馬台国に至るという行程についても十分理解できるのである。

倭僞の倭国巡視の報告は「魏志倭人伝」に記す約二千文字よりはるかに多くの字数を使

い、詳細なものであったであろう。そして、倭僞の倭国巡視の報告及び次に述べる長政の倭国派遣の報告は、陳寿の「魏志倭人伝」撰述において基本的な資料となったと考える。さらに、陳寿が参考としたと言われる、魚豢^{ぎょかん}が撰した「魏略」の倭人の条も同様であったことは想像に難くない。

呉は、魏に代わって成立した晋（二百六十五年～三百十六年）に亡ぼされる（二百八十年）まで存続し、倭僞の倭国巡視の報告は、呉への備えとしての具体的な役割には至らなかったが、間もなく倭国を救う効果を発揮する。倭僞の倭国巡視の八年後の正始八年（二百四十七年）、卑弥呼からの狗奴国との「相攻撃する状」の報告を受け、解決の要請を受けた帯方郡は塞曹掾史長政等を派遣した。ことは緊急を要する。長政は、直接伊都国あるいは奴国の港に上陸し、二日市地峡を通り、筑紫平野に出て最短距離で邪馬台国に向かったであろう。長政は、倭僞の報告によって邪馬台国の国情、狗奴国との関わり、狗奴国の政情も十分に把握しており、これを基に邪馬台国と狗奴国との調停に臨み、狗奴国の融和を引き出し、武力を使うことなく和解に導いたのである。

参考文献

- 石原道博編訳 「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝（1）」岩波文庫 （株）岩波書店 1951年
- 全訳注 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 「倭国伝 中国正史に描かれた日本」講談社学術文庫（株） 2011年
- 岡部裕俊 「伊都国発掘物語」 新・奴国展シンポジウムレジメ 2015年
- 岡部裕俊 「魏氏倭人伝と伊都国」 「よみがえる邪馬台国」フォーラムレジメ 2014年
- 佐伯有清 「魏志倭人伝を読む一邪馬台国への道― 上 下」 歴史文化ライブラリー（株）吉川弘文館 2000年
- 榊原英夫 「邪馬台国への径―「魏志東夷伝」から「邪馬台国」を読み解こう」 海鳥社 2015年
- 高柴昭 「邪馬台国は福岡平野にあった―一通説に惑わされない21の鍵」 文藝春秋企画出版部 2015年
- 西谷正編 「伊都国の研究」 学生社 2012年
- 丸山雍成 「邪馬台国 魏使が歩いた道」(株)吉川弘文館 2009年
- 森 浩一 「倭人伝を読みなおす」(株)筑摩書房 2010年

塩田 泰弘（しおた やすひろ）

熊本県生まれ

平成24年退職時に友人から勧められて大学の古代史に関する公開講座を受講したことが契機で、従来からの古代史好きが高じてのめり込む。現在、大学の公開講座、カルチャーセンターの講座、講演会等に通い、諸先生の著書を購読するなど勉学に勤しんでいる。

論文「魏志倭人伝からみた邪馬台国概説」（「季刊 邪馬台国」126号）、「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」（「季刊 邪馬台国」131号）」がある。